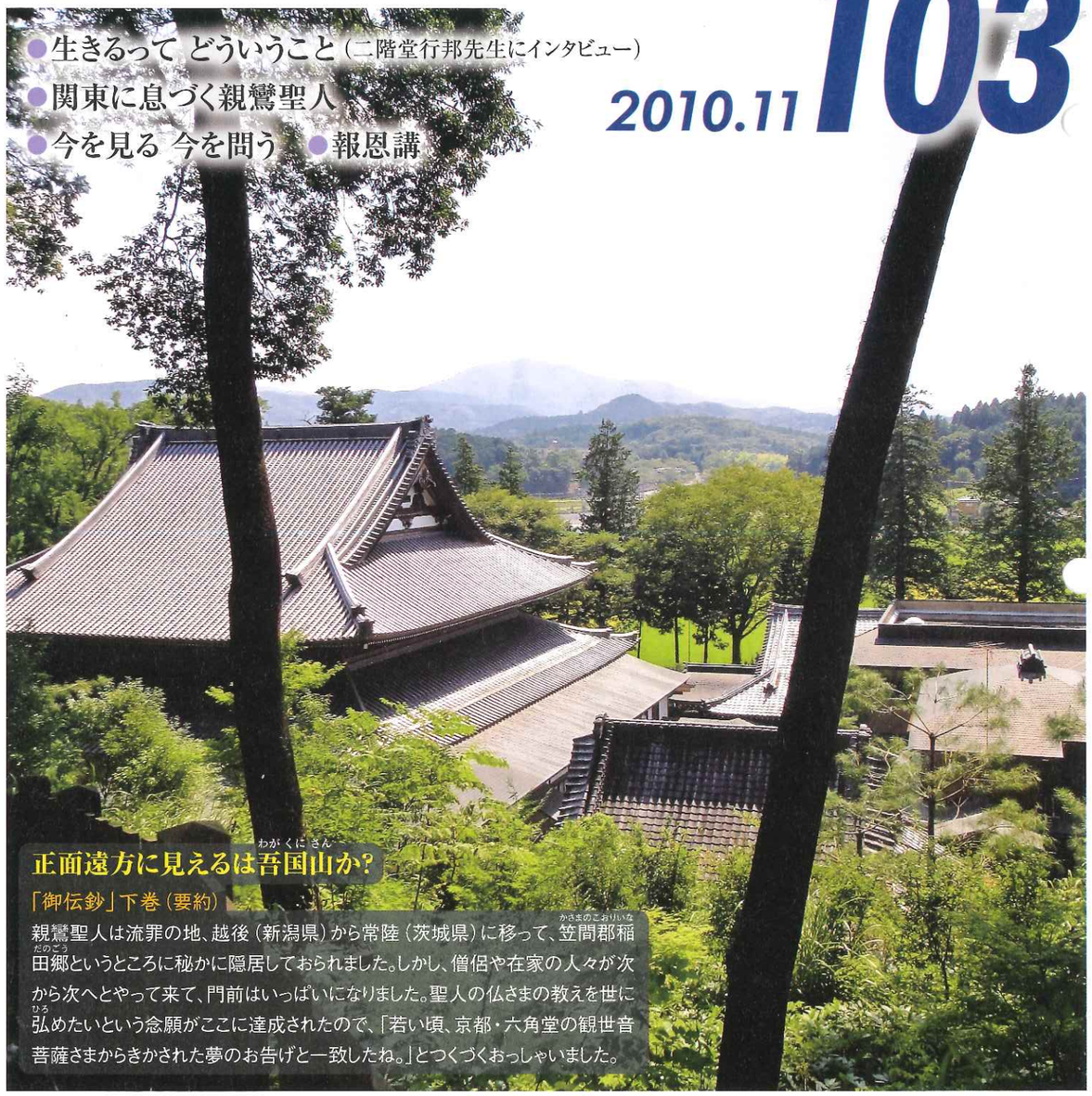
真宗大谷派岐阜教区

岐阜同朋 ぎふどうぼう

2010.11 103

●生きるって どういうこと（二階堂行邦先生にインタビュー）
●関東に息づく親鸞聖人
●今を見る 今を問う ●報恩講



正面遠方に見えるは吾国山か?

「御伝鈔」下巻（要約）

親鸞聖人は流罪の地、越後（新潟県）から常陸（茨城県）に移って、笠間郡稲田郷というところに秘かに隠居しておられました。しかし、僧侶や在家の人々が次から次へとやって来て、門前はいっぱいになりました。聖人の仏さまの教えを世に弘めたいという念願がここに達成されたので、「若い頃、京都・六角堂の観世音菩薩さまからきかされた夢のお告げと一致したね。」とつくづくおっしゃいました。

茨城県笠間市・稲田御坊西念寺

この「岐阜同朋」103号が発行される頃には、各寺院で年に一度の一大行事の「報恩講」が執り行われています。報恩講とは元来、宗祖親鸞聖人の恩徳を偲びつつ、わが身をいただいて生かされていることを仏さまに報恩感謝する念仏者の集いです。

家庭でお勤めする報恩講は「おぶつじ」・「おとりこし」ともいいます。家庭でも年に一度、ご先祖のお徳を偲び、家族が会い寄り集い、「生きる」ことを朋にあらためて問うていただく大事な日でもあるわけです。

五色幕

報恩講などで吊り下げられる「五色幕」。この意味、起こりは諸説ありますが、その中のひとつにお釈迦さまのお姿、み教えを表しているという説があります。青は釈迦の髪の色（禅定）、黄は釈迦の身体そのもの（金剛心）で、赤は釈迦の血液（常の精進）、白は釈迦の歯（清浄心）、黒は釈迦の袈裟の色。（現在は黒に変わり紫、青に変わり緑に変化したようです。）

また『往生要集』にある「臨終行儀」で、阿弥陀仏の左手と病者の左手を五色の細長い布でつむぐという一説は有名です。平安時代の人々が死後、阿弥陀仏の浄土に導かれることを強く願っていた様がうかがわれます。

御伝鈔 御絵伝

親鸞聖人のひ孫である覚如上人が、聖人没後33年に聖人の御遺徳を讃えた『報恩講私記』を著わされました。

続いて、その翌年の10月には、聖人の遺徳を讃える気持ちをあらたに『親鸞伝絵』（初稿）を著わされました。

『親鸞伝絵』とは、聖人の伝記絵という意味で、詞書（ことばがき）と絵とを交互に連ねた絵巻物です。

浄土真宗では、詞書きの部分だけを『御伝鈔』（上巻・八段、下巻・七段）といい、絵の部分だけを縦型の四幅の掛軸にして『御絵伝』といい、報恩講の時に、余間に掛けられます。

御絵伝（部分）

御伝鈔拝読（本山）

御伝鈔は報恩講の中日に当る初夜に拝読し、二昼夜の法要ならば二日目の初夜、一昼夜の法要ならば初日の初夜に拝読します。

編集後記

清少納言は、『枕草子』の中で **秋は、夕暮。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、飛び急ぐさへあはれなり。まして雁などの列ねたるがいと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。**と書いている。流石だと思う。しかし、今の自分には自然を楽しむ余裕はない。ついつい親鸞聖人が**忘憂の名あり**（『真宗聖典』P672）といわれた酒を飲んでは愚痴が出る。『蓮如上人御一代記聞書』には、**蓮如上人、仰せられ候う。「物をいえいえ」と、仰せられ候う。「物をいわぬ者は、おそろしき」と、仰せられ候う。……「物を申せば、心底もきこえ、また、人にもなおさるるなり。ただ、物を申せ」と、仰せられ候う由候う。**（『真宗聖典』P871）としるされているが、心境としては、松尾芭蕉の晩年の句の**物言えば唇寒し秋の風**が実感だ。この句には座右の銘、**「人の短をいふ事なかれ、己が長をとく事なかれ」**と前書きされている。

（櫛田昭裕）

発行：岐阜教区教化委員会　真宗大谷派岐阜教務所　橘 秀憲　〒500-8054 岐阜市大門町1　TEL.058-266-1378　編集：岐阜同朋編集委員会

生きるってどういうこと

二階堂行邦先生に1インタビュー

今、社会では「いのち」という言葉が頻繁に叫ばれていますが、果たして「このいのちということを、どのように受け止めているのか」と疑問に思うこともあります。と同時に、毎日のように殺人事件等がテレビや新聞で報道され、死というものがすぐ隣にあり、それに対し、どこかで死が麻痺しているような感覚さえ覚える時があります。このような現況の中で、いのちをどのように受け止めていけばいいのでしょうか。

今回は、「いのちを生きたことが南無阿弥陀佛ということに非常に深く関わることではないか」と、言われ続けてこられた二階堂行邦先生からお話をいただきたく、猛暑の続いた8月の終わり、東京教区東京4組専福寺へ先生を訪ねてお話をうかがってきました。

新宿の高層ビル群の中にありながらも大樹に包まれた境内、そこはあたかも大都会の真ん中であることを忘れてしまうかのよう、周りの雑踏からとざされていました。

そんな中で、静かでありながら、しかし心の奥深くから出される先生の凛としたお言葉に、我々耳を傾けながら、身をおかさせていただきました。

その先生のお話を今号・次号と、二回にわたってお伝えしていきたいと思います。

いのちといのちが出会うところ

今一番こわい人間は肉親ですね。親が子どもを殺す、子どもが親を殺すということがあるけれど、ともすると私たちもいのちを奪う人間にすぐになれるんです。「いのち」を考える時、そこには仏法が大きくかかわってくるんです。いえ、不可欠だと思われます。人間にとって「殺」は、個人の善悪の問題よりも罪業の問題です。

今は、親が子どもを殺すという子殺しの時代になったと嘆くわけですが、人間は親が子どもをも殺すんですね。以前聞法会の場で、「私は子どもを二人殺しました。」と泣く人がいました。二人の子どもの堕胎をしたと。私は子殺しをしたんだと言うのです。堕胎を子殺しの罪だと告白する人は少ないが、でもみんな罪を抱えているのです。水子供養をすればいいとか悪いとかじゃあないのですが、この頃は水子供養の依頼がほとんど無くなりましたね。これは罪の意識が希薄になったからでしょうか。何とも言えません。でも堕胎が少なくなったわけではないのです。

子が親を殺す。親が子を殺すということは、今に始まったわけではないのです。阿闍世も韋提希も頻婆娑羅も親殺し子殺しを犯してきた人です。「**さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし**」と『歎異抄』に教えられることです。仏法の教えがなければ、人間は業縁存在だということがわからない。大切ないのちを殺すのは悪人。善人は殺さない者だと決めているだけの話です。

尊いいのちを大切にしようと言いながら、事実そのいのちに背き逆らい、殺にまで至る業縁を生きているわたしなのですね。慚愧のほかありません。いのちを尊び大切にするとは、いのちに懺悔することなのであります。

それから、仏教はいのちをどう受け止めているか。一言で言えば、「帰命無量寿如来」。「無量寿如来に帰命せよ」と呼び掛けています。限りあるいのちをずっと延ばしていけば、無量の無限のいのちを得ることができるんじゃないか、そういう時代がくるかもしれない。不老不死とは人間にとって夢ですね。ずっと昔から、人間のいのちが誕生してから、なんとかして不老長寿にあいたいということが人間の欲望です。科学がそれを実現するかもしれない。しかしそれは人間にとって本当に幸せなことでしょうか。いのちが本当にありがたいと受け取れるかどうか。不老不死は死ぬに死ねないんだから、これもやっかいですね。死なない薬が出来たら今度は死ぬに死にきれない、なんべん死んでも生きている。そういう世界を地獄というんです。死にたいと思えば死ねる世界にはまだ自由がある。死にたいと思っても死ねない世界、終わりのない世界、死んだとたんにまた生き返る世界、そういう地獄が目の前にきている。しかもそれが地獄だとわからない。

仏教では、如来のいのちを「無量寿」と言います。無量寿とは、不老長寿・不死の薬ではありません。仏教では無量の寿に必ず帰命とか南無がつくんですね。御本尊だって阿弥陀様っていうけど、「南無阿弥陀佛」が御本尊ですね。ここに南無がついているんですよ。帰命がついて「いのちに帰命せよ」と、そういう教えなんです。そこのところの意味を我々仏教徒はどう受け取ったらいいのか。地獄に落ちても地獄がわからない。そういう時代の中で、無量寿如来に帰命せよという教え。それをはっきりさせないといけないんじゃないかと思いますね。

そこに『正信偈』でも、「帰命無量寿如来」に続いて「南無不可思議光」とあります。これが大事です。無量寿というのは、この肉体が永遠に死なないいのちなのかと、いやそんな事を言っているんじゃない。無量というのは、限りのあるいのちがずっと無限に、不老長寿をねがっているのではないんだ。いのちは長さとか重さでもって計ることはできない。それがいのちの本質だということが言いたいんだと思います。いのちだけをいくら分析しても、そこには光というものがなければいのちもわからない。いのちと光は対になる言葉です。いのちは大慈悲心です。慈悲の心、大悲の心、それをいのちとして象徴的に表現するんです。そのいのちに帰命せよと、こう表現したわけですね。

光とは智慧です。不可思議というのはいわゆる人智ではわからない摩訶不思議という意味ではありません。仏の智慧は思議を超越した計らいなき智慧です。思議すること自体が不可能な仏智ですから、無量寿の「量」と不可思議の「思議」とは一緒です。人間の計らいです。そういう、計るとか計算するとか、そういう世界を超えている世界に智慧と慈悲という本質があるんです。

いのちと光はバラバラに考えてはいけないのです。光にあたったいのちじゃなければ真実のいのちと言えないし、また光、智慧だけではいのちを表現できない。もっと言えば、智慧ある慈悲というか、愛といってもいいのでしょう。人間というのは、智慧ある愛を求めているんですよ。ただただ愛だけでは盲愛に終わる。ただ智慧だけでは冷たくて安らげない。人間が本当に安らげるのは、智慧ある愛、これが念仏が求める心じゃないかと思いますね。

二階堂 行邦（にかいどう ゆきくに）先生 プロフィール
1930（昭和5）年、東京生まれ。東京教区専福寺前住職。大谷大学文学部卒。
著書に、『いのちを生きる』『自分が自分になる』『南無阿弥陀仏の葬儀』（ともに東本願寺出版部）など。

如来の大慈悲心がこめられた「唯除」

人間の犯す罪の問題は、厄介なことです。如来の第十八願に、どんな罪を犯した者も救い摂ると約束しながら、親殺しと本願を疑う罪は除くという但し書き（唯除の文）が付いているのです。大矛盾です。

「唯除五逆　誹謗正法」というは、唯除というは、ただのぞくということばなり（尊号真像銘文）とあります。五逆罪と謗法という二つの罪ですね。五逆とは殺人です。倫理的な罪悪ですね。誹謗正法というのは、正法・末法の教えをけなす、そしる、そして疑うということですが、宗教的な罪です。こういう二つの罪が重いということは、人間はだいたいわかんないんですね。まだ殺人は、人のいのちを殺してはいけないんだということは常識としてあるのですが、それでもそれが今はわかんなくなってきている。仏法をそしる、仏法を疑う、正しい教えに疑いの心をもつ。それが罪だということは、念仏の本質が聞けないとわからない問題です。

教えられなきゃわかんない、教えられてもわかんないけど、しかしそれをなんとかして、仏法を疑うということは一番の罪なんだということ、人間のもっている罪というより、人間としての罪ですね。個人的な悪いことをした罪というのではないということを教えてもらわなければならないんですね。

どんな悪いことをしても、無条件で救ってあげますよと、それが本願ですが、それなら悪いことをしてもいいんじゃないか、無理していい事をする必要がないんじゃないかと。こういう受け取り方をする人が必ず出てきます。親鸞聖人もお手紙の中の悩みはそれですね。

悪いこと、人を殺すとか仏法をそしるということは、自力の執着です。執着心に対するそんな悪ですから、それは普通の人にはわからない。しかしそれは大きな罪を犯したんだということを知らしめしていく、それが仏の智慧なんです。慈悲の心の中に、智慧をもっているんです。智慧ある慈悲なんですよ。智慧とは何か、それは罪だということを知らしめる力ですね。智慧がなければ、光がなければ大慈悲心がはたらかないんですよ。

親鸞聖人も、教行信証でも、信巻だけは、「唯除」の問題を出していながら、善導大師の言葉を出してそれで終わってしまっているんです。それを聖人ご自身はこう受けとりますと書いてないんです。けれども、それが唯一書いてあるのが、前に掲げた『尊号真像銘文』のあるお言葉です。ここだけなんですね。ただおまえが悪いから除く。それはいけない事だと、悲しい事だと。仏様は一切を救うんだけれども、但し書きがある。

五逆のつみびとをきらい、誹謗のおもきとがをしらせんとなり。

知らないで犯している罪だから、まず知らせなければならない。

このふたつのつみのおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべし、としらせんとなり。

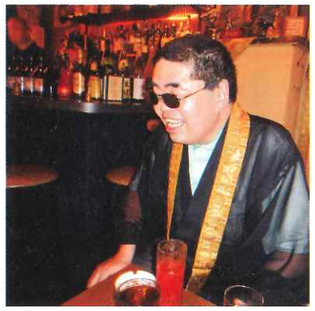
知らせるということは智慧です。いのちには必ず裏側に智慧がある。智慧のない愛は盲愛です。智慧と愛、智慧と慈悲というのは、ひとつの心の裏表じゃないかと思うんです。片方だけでは成りたたないのです。仏様の本当のいのちっていうのは、人間の無明の闇を破る智慧の光に照らされて如来の無量寿を頂くことができるのであります。

本願の唯除の文は、罪人を排除するのではありません。「つみのおもきことをしめして」一切の衆生を救わんという大悲心の教えであり、仏のいのちの叫びなのであります。　（次号へつづく）

関東に息づく親鸞聖人

去る8月31日・9月1日の2日間、岐阜同朋編集委員会のメンバー7名で関東研修旅行に出かけました。31日の朝6時に岐阜を出て中央道で新宿を目指しました。東京に入る直前、八王子辺りで事故渋滞に見舞われどうなるかと気をもみましたが、余裕を持って出たおかげで何とか予定時刻には新宿に入ることができ、今回の主たる目的である二階堂行邦先生のインタビュー取材を午後4時頃には終えることができました。

その後宿泊のホテルに向かい楽しくみんなで夕食を済ませた後、新宿荒木町（四谷）にある「坊主バー」に向かいました。坊主バーとはお酒を飲みながら悩みや人生について店員（僧侶）から法話を聞き元気になって帰っていく、現代のストレス社会にどっぷりつかった人々を救済するとてもユニークなバー（居酒屋）なのです。午後8時半頃に到着、オーナーの大谷派僧侶、田口弘（弘願）師が出迎えてくださいました。お酒をいただく前に、店内にあるお内仏の前に座りみんなで正信偈・同朋奉讃のお勤めをし、いよいよご法話が始まります。目と耳がご不自由であるがゆえに田口さんにしか見えない世界があり、そんな世界観を語ってくださいました。以前、岐阜別院仏教公開講座に講師としておいでいただいた時のお話もあり、とても素敵で豊かな時間を過ごすことができました。



2日目は8時にホテルを出発。築地本願寺（本願寺派東京別院）を目指しました。江戸時代は浅草にあったようですが、1657年（明暦3年）の「明暦の大火」で焼け、区画整理のため旧地に再建が許されず、替地として江戸幕府にこの地が指定され、海を埋め立て、地を築き、この地に再建されたようです。東京を代表する寺院として有名ですが、現在の本堂は古代インド仏教様式で建てられ、特に我々大谷派の関係者には異様なほど独特な建造物でした。近年では著名人の葬儀がよく執り行われることでも有名です。周辺には築地中央卸市場があり、朝からおいしいお寿司がいただけるようです。

参詣を済ませ、次なる目的地、浅草東京本願寺に向かいました。かつては大谷派東京別院として東京並びに関東周辺を統括する宗門寺院でしたが、ご承知のように教団問題にゆれ、今は宗門をはなれ他の宗教法人として独立しました。かえすがえすも残念なことであり悲しむべきことであります。本堂内ではたまたま法要が行われ僧侶の方々の読経が聞こえてまいりましたが、僧侶の衣も袈裟もお経もすべて大谷派と同様でした。私たち大谷派僧侶・門徒にとってこの教団問題とはいったい何であったのか、多

くの犠牲を伴ってでも守らなければならなかったものとは何だったのか、この問題を踏まえ我々はどこに向かわねばならないのかを問い直し、正しく理解していかねばならないなと思いつつ参拝させていただきました。現在は「浄土真宗東本願寺派本山東本願寺」と呼ぶそうですが、境内には多くのお墓があり、立派な納骨堂が目立つお寺でした。

その後、浅草の浅草寺前（夥しい数の参拝客）を通過し、建設中のスカイツリーを写真に収め、一路、茨城県笠間市の稲田御坊西念寺（浄土真宗単立寺院）に向かいました。

東京と笠間は思っていたより遠く高速道路で1時間半以上かかりやっとの思いでお昼頃西念寺に到着しました。

この地は親鸞聖人が42歳の時、越後の流罪を許されて妻の恵信尼や子どもたちとともに関東に入られ草庵を結ばれた地です。親鸞聖人一家は当時下野国から常陸国笠間郡にかけての領主宇都宮頼綱をたよりにこの地に入られました。一家は越後から南の信濃に進み、碓氷峠を東に越え上野国に入り利根川の北岸を進んで常陸国に入られたといわれています。

聖人の20年に及ぶ関東（東国）での念仏布教の根拠地がここ稲田草庵跡西念寺です。当時はすでに様々な信仰があり、法華経、観音様等々多くは呪術を基礎にしていた中で新しい論理、新しい思想がどう浸透していったか、困難を極めた布教活動であったことが推測されます。親鸞聖人の人間性・生きる姿勢・信仰が多くの人々を感動させたことは間違いないでしょう。

越後での厳しい生活を終え、新たな布教地に向かわれ腰を据えて念仏の教えを説いていかれた親鸞聖人。この草庵にて教行信証の制作を開始されたことからこの地を浄土真宗立教開宗の地と呼んでいるようです。今は豊かな田園風景が広がる笠間市稲田、西念寺の境内の裏に小高い山があり、息を切らしながら少し登ると田園地帯の向こうに山々が広がり、あたかも比叡山から京都東山の山並みを彷彿させてくれます。（表紙参照）親鸞聖人は20年この地を愛し、自身の宗教的信念をこの地から発信なさったのでしょう。わずかばかりではありますが、聖人の御心を偲ばせていただくよい御縁を頂戴いたしました。

西念寺を出て、近くの本格的蕎麦屋で遅い昼食をとり午後2時頃に帰路につきました。岐阜羽島の自宅に着いたのは午後10時前でした。

2日間の短い研修ではありましたが、同志とともに有意義な時間を過ごさせていただいたことを心から感謝いたしております。

（編集委員　尾畑英和）

今を見る 今を問う No.3

「岐阜同朋」編集委員
小笠原まや

一言で差別といいますが、では一体どんな差別があるでしょうか。

差別の種類には

❶身分に関する差別（カースト・部落・家柄等）
❷階級と職業に関する差別（路上生活者・ニート・フリーター・収入の差・勝ち組負け組）
❸人種・民族に関する差別（人種・民族・先住民族・少数民族）
❹言語に関する差別（言語・差別表現）
❺性に関する差別（性・男尊女卑・女尊男卑）
❻能力に関する差別（障害者）
❼病人に関する差別（ハンセン病・エイズHIV）

など、いろいろとあります。

なぜ差別が起きるのでしょうか。差別を辞書で調べてみると、①ある基準に基づいて、差をつけて区別すること。②理由なく、他より低く扱うこと。と出ています。

では、私達は差別をどう感じているでしょうか。人間は無意識のうちにも、人と自分を比較して優劣をつけたがる生き物です。自分の優越感を確認して安心しようとしています。これこそが差別の本質だといえます。

つまり私達は、差別するという弱い心を持った生き物であり、それはすべての人にそういう原罪は存在するということです。

差別をじっくり考えると、なんて人間は愚かな者なのでしょう。

差別する人間より差別された人間の方が、苦しみ悔しい気持ちがいつまでも残ります。

私自身、知らず知らずの内に差別表現をしていることと思いますが、そのことは忘れ、差別されたことのみ、覚えているのが現実なのです。

●

10年前岐阜教区主催のハンセン病についての学習会がありました。

私はそこで、恥ずかしながら初めてハンセン病の悲劇、差別を知りました。たまたまハンセン病という病気になったため、全国にある療養所（現在全国に国立療養所は15カ所有ります）に隔離され、自分の名前も変えさせられ、一生家に帰ることも出来ず療養所での生活。

同じ人間なのに、病気のため少し後遺症が出ただけなのに、違う人間として差別されてしまったのです。

5年前、教区主催の研修で出かけた岡山県にあるハンセン病療養所邑久光明園で、私は岐阜県出身の元ハンセン病老夫婦と親しくなり今でも交流を続けています。気さくな老夫婦。

私にはもう両親が他界していないため、身勝手とは知りながら、私の親のようにさせて頂いています。

「ハンセン病になったことは辛かったけど、ここで夫と知り合い結婚出来、こうやって何十年一緒に生活していると、差別された寂しさ、悔しさはどこかにいったよ」と笑って話して頂けたお婆ちゃんの顔がとても印象的でした。

今年3月、お爺ちゃんが病気で亡くなられ、私は邑久光明園まで葬儀に出かけました。

お骨拾いをしていた時、何も健全な人と変わらないきれいな白いお骨。

何もかも同じ人間なのに、たまたまハンセン病になっただけなのに、なぜ差別されてしまったのだろうか。ますます差別をするという人間の弱い心を強く感じる自分でした。

老夫婦のお部屋には小さな御内仏があり「毎日お参りしているのよ」とお婆ちゃんはハンセン病のため少し後遺症が残る不自由な手で合掌されました。

差別されて苦しみ、しかしその中で喜びを持って生きて来た老夫婦。

『いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり。』（唯信鈔文意）と親鸞聖人の教えがあります。

これは阿弥陀如来の本願は、全ての人に平等にはたらき、そのはたらきによって善人も悪人も、貴い人も賤しい人も、すべて嫌うことなく、選ぶことなく救われていくという教えに私は気づかせて頂きました。

●

最後にお婆ちゃんの書かれた短歌を紹介します。この短歌であなたは何を感じていただけるでしょうか。

「雁帰る　日暮の空を眺めいて
帰る里なき生涯島で」